

釣りに釣られて

高原英夫



## 第十九回 「岩魚は暗夜で釣れるのか」

イワナ釣りは、本来であれば朝早くから出かけて釣る必要はない。自然の生物として食うことがイワナとしては何よりも必要な作業であり存在なのである。ましてや海のように潮の満ち引きというリズムがあるわけでもなく、ともかく一日中、川の虫や木の葉から落ちてくる虫を食べているのである。

たとえば、私は犬を飼って十五年になる。簡単に言い過ぎるかも知れないが、人間に飼われエサには困るはずもないその犬が、いつでも鼻で地面を擦るようにして私の引き綱に従う。とてもかわいがっている犬なのだが、やはり犬、犬畜生なのだと思います。エサで釣り、訓練をし、エサで従わせる。日常目の前にいる愛犬でさえそうなのだから、イワナに人間の想いなど伝えようもなく、ただただエサを探し続けているはずだ。

ではなぜ早く出かけるのか。それは、小さな溪流に誰か先に入ってしまうと、その後に入った日には全然と違っていい位釣れないからだ。イワナが岩蔭に隠れてし

まい出てこないのだ。だから夜明け前に出かけ、車を目立つように林道に置き、「私がここで釣りをしています」というテリトリーの宣言をするのである。あの溪流のあの場所をやってみたいとなると、誰よりも早くそこに立って釣っていないとはいけないのだ。だから溪流に入った時、石の上はまだ濡れたままの足跡はないか、砂場にある足跡は今ついたものか、きのうのものか、すぐ見極めないと、ただ水の中进行でできただけの話にしかない。

溪流釣りのマナーとして、先に車があつた時は、随分と上流まで山道を車で走り、そこから水に入る。それもかなわない時は全く別な溪流へ向かう。もう一度里までおり、そしてまた、山道を登っていくのだ。

そんなある日、Sさんと二人、真暗いうちに目的の釣り場についてしまった。そこは開けていて、上に木の枝もなく、釣りの準備をするには最適な所だった。それというのも溪流釣りの糸もハリスも微細で、明かりのないところではとても扱えない。ましてや林の中で、しかも川は峰と峰の最も低い部分を流れている。だから川なのだ。つまり、日の出よりさらに時間が経たないと手元が見えないのだ。陽の

光が手元まで届くまでの間、そこから先へ進めない。その日、車を置いたすぐ下には水の流れがあり、そこで左へ流れを変えていて、大きな溜まりになっていた。いつもだと明るくなるまで車の中でシートを倒し眠るまでもなく時をやり過ごすのだが、

「なあ、明るくなるまで、ここで、夜釣りしてみるか」

「ほい」とばかりに、暗夜の中、二人は七、八メートルの溜まりを左右に分かれ、糸を垂らした。私たちにもほとんど見えない。ただ何度となくそこに車を停めているので、ほんの少しの明かりでも周りが頭に入っていて、歩けるのだ。ツツツーンとあたりがあつた。

「きたぞ！」

お互いに思いもよらない反応に驚きながら、たちまち、二、三匹ずつ釣り上げた。エサが見えているはずはないと思うのだが、匂いに反応しているのだろうか。そういえば、海の夜釣りで、しかも百メートル近い海底からでも魚は釣れる。確かにメバルとか眼が発達しているとはいえ、エサが見えて食いついてきているのだろ

うか。そんな疑問がどんどん膨らんだ。二人には、それなら津軽半島のあの山奥のあの砂防ダムの半分は土砂で埋まってはいるが、いい水溜りがある。あそこでやれば…。次の計画に頭の中は最速で回転を始めた。

それから数日後、二人はその山に車を走らせていた。夜釣りだから、仕事を終えてからでよかつた。小一時間も走ると陸奥湾に流れ込むその川につきあたり左へ川沿いに折れ、いよいよ山道に入っていく。急な道が続くが、途中の少し広がった山道に車を置く。そこから先は大きな石が転がっていたり、土砂崩れがあつたりで、車だとかえつて自由が利かない。何十回となく釣りをしている溪流なので、その山道はすべてわかっている。もう午後七時を過ぎているが、あと四、五十分は山道を登らなければならぬ。ヘッドランプを点し進む。下は百メートルはあろうかという絶壁がところどころで見え隠れし足がすくむ。そして崩れた岩で塞がっている道を通り越えて進む。その道は、いま行こうとしている砂防ダムをつくるためにつけられた道らしかったが、とても道とはいえない。根元の土が削られてしまい、今にも倒れんばかりの木がやつと立っている。翌年の春には間違いないで倒れて道を塞ぐ

だろう。

何度も左右に折り曲がり、目的地の近くまでたどり着くと、今度は、ダムまで降りなければならぬ。ここには道はもうない。ガサガサと藪を進み、やっとダムの横へ突き出た淵に落ち着いた。イワナに警戒されない様、ヘッドランプは消しての準備なのだが、それはすぐに終えた。そしてここで禁じ手ともいえる手段に出た。

まずその大きな水溜りに流れ込む細い入り口まで行つた。そしてタマクラミミズを五、六匹取り出し、石で潰し、ミンチにしたのである。もちろん水の中でやれば振動が伝わり元も子もなくなってしまう。水の中を伝う石のぶつかりあう音は鈍く重たく伝わって、イワナは一瞬のうちに身を隠してしまう。ミンチを次々と流れに放つ。もう一分もしないうちに水溜りの中のイワナ達はその匂いに狂つた様になりエサを求めはじめははずだ。

闇の中で目も慣れ、二人は黙々と作業を終え、また元の淵まで戻り、あえて落ちて着き払い、

「さあ、やってみるか」と、まず私から水面にそうつと糸を垂らした。やっぱり

だった。きた！きた！手首に重さのかかるヤツだ。しかも竿の弾力を押さえつけていて、右に左にと泳ぎ回り、浮いてくる様子を見せない。しばらくかけて上げると、三十四、五センチだろうか。しかも、かかった瞬間、明らかに数匹が同じエサを追っていて踊りでもしている様に、ギラギラと銀色の腹を見せ身をよじり、奪い合っているのがわかる。次はSさんの番だ。またすぐきた。もつと大きいイワナがきた。交互に一時間もやっただろうか。最初に上げた二、三匹ずつだけはビクに入れた。釣り上げたイワナ全て持ち帰るつもりなど毛頭なく、ひとつは本当に夜釣りで釣れたこと、ひとつはそのイワナの手応え、人を近づけない理想的な山奥の釣り、思い通りの結果に二人は満足した。九時を過ぎていた。山道を少し浮いた足取りで降りた。

しかし、それから数年後、そのダムは全て土砂で埋まり、脇にわずかに流れを残すのみとなった。そして、その下流にまた砂防ダムができた。かつていい溪相の連続だったところが、ブルドーザーが入り、ダンプトラックが資材を運び、すっかり一本の工事用道路ができていて、溪流の様相は死んだ。同じようなことが、西海岸



の鱒ヶ沢を少し過ぎた辺りの川でもあった。土石流から人命、財産を守るべき砂防ダムなのだが、すぐ埋まり、また新しいものが必要となる。その埋まった土砂がある意味、被害を防いだ量といえるのかも知れないが、がちり、山の奥の奥まで爪跡を残す人間の工事は、これでいいのかといつも思ってしまう。

もうこの十年は溪流釣りをしていない。ある意味、やりつくした気がしないでもない。憐れみが先立つようになり、イワナの棲む環境のあまりの狭さ、そこに私の竿がエサを放り込むことで、そこをさらにさらにわずかな世界にしてしまう。イワナ達はいとおしくも、川の源流のわずか五十センチはあるだろうかという水溜りにも潜んでいる。そこまで見てしまうと、もうイワナの生き様にただ畏敬せざるを得ない。言葉を語らない彼の声を聞き守ることが、人間のできるわずかな自然へのお礼としなければならない。

春になると、その溪流へ、ウドとかタラノメを採りにいく。夏になるとその源流の近くにはぶつといミズが出ている。そう簡単に人が入れない所なのだが、私は今でも目をつむつても歩ける気がする。その光景は目に焼きついたままもう絶対変わ

らない。そして実際にそうあつて欲しいと思うのだ。

平成  
23  
年9  
月